

『境界を越えて——比較文明学の現在』第22号をお届けする。

コロナ禍はとどまるところを知らず、第6波を迎え、感染者の波が近くまで押し寄せてきていることを実感する。そのなかで、今号を公刊できたのは多くの方のお力添えあつてのことだ。なかなかキャンパスで顔と顔を合わせて議論をすることができない状況が続くが、オンラインによる議論や書かれた文字を通じた意見交換については、随分とスムーズに行われるようになってきた。その甲斐もあり、今号は比較的充実した内容となることができた。

まず特集にて、比較文明学専攻の枠を超えて文学研究科教育学専攻の河野哲也氏、兼任講師として立教にて教鞭をとってくださっている齋藤元紀氏、永井玲衣氏らをお招きした座談会を掲載できたのは大きな収穫となったと思われる。今後も、この雑誌が立教大学内外でさまざまに研究・教育を携わる方々と有機的に連携してゆく場となればと思う。

論文についても、前号に引き続いて拙論の後半部を掲載いただいたほか、大学院生からも査読論文（北野氏）、研究ノート（高沼氏）の投稿があった。

優秀修論、研究交流会記録については例年通りであるが、今号では書評欄にて新たな試みを行った。これまで、いつのころからか書評については所属する大学院生が執筆者となり、各々の研究領域のなかで目立った著作を取り上げることが慣例的に行われてきた。だが、今号では、比較文明学専攻を修了し、博士論文を公刊した2名の方（小平氏、鈴木氏）の著作について外部から評者をお招きして講評をいただいた。それにより書評欄もいっそう充実したが、今後も執筆者、対象本について、こうした試みは続けてゆくべきではないか。

今回の編集作業については、これまで同様に、深澤晃平氏・長田年伸氏に多大なるご協力をいただいた。記して感謝する次第である。

2022年2月
渡名喜庸哲